

週刊すず辰^{たっ} (第344号) 令和1.6.10

今週も、“すず辰(すずたっ)”が厳選しました農家さんの野菜(果物)たちをお買い上げいただきありがとうございます。ぜひおいしいもの好きなお友達・お知り合いにもお声かけください。お客様の輪が八百屋の力になります。

●今週のピックアップ商品○(来週もあります。)

南高梅、木曜に来ます！

梅を漬ける季節がやってきました。梅というと、青梅と南高梅とが定番ですが、すず辰では、南高梅の一択！大粒で皮が薄く、種も小さいので、果肉が多く、梅のおいしさを最大限に楽しめます。梅酒だと青梅という方もいるかもですが、南高梅、ちょっと贅沢ですがお勧めです。量り売りですのでお好きな量でどうぞ。



えんどうまめ、今季最後です。

豆ごはんや卵とじ、シンプルには塩茹でそのまま。手間かけると翡翠豆と活躍するえんどうまめ(通称グリーンピース)。小学校時代の給食で多くの苦手になる奴ですが、国産の豆は皮が薄く味もよく実はおいしいのです。(給食用は輸入の缶詰のことが多い)。年に一度は食べてみたいという方増えます。まだの方はぜひ！もう一回食べたいという方もぜひ！



▲すず辰のこぼれ話▽ 次の京とうふは6/11、13、15、18、20です。

すず辰マガジンvol.1改訂版！

店の自己紹介冊子、“すず辰マガジンvol.1”。2年半前に作成したのですが、さすがに始めて作った冊子だったので、デザインはやぼったく、見づらくもあり、内容的にも少し変更したい箇所もあったので、この度改訂版を作りました！

八百屋としての想いや、季節のお勧め野菜、八百屋の宅配セットの話や、八百屋の裏話、そして、店主の自己紹介なども。これ1冊で、お店のことをぐっつとわかってもらえる内容です。前の読んだよー、と言う方もぜひ。お知り合いにもぜひどうぞ！



◆ちよっとまじめな話：“考える”と“思う”◆

先週、子どもに教え過ぎず、体験させて自分で考えさせるのが大事、と言ったことを書きましたが、そこでふと思ったのが、前に女房が書いていた、“考える”と“思う”の違いについてです。

学生の指導をしていて、「こう思いました」との言葉に、「思ったでなく、どう考えたかのプロセスを言って！」と研究者・指導者として苦悩するわけですが。では両者の違いは？、ってことで、女房の孫引きをそのまま引用。

“つまり、「思う」とは、一つのイメージが心の中にできあがっていて、その一つが変わらずあること。胸の中に二つあるいは三つを比較して、これかあれか、こうしてああしてと選択し構成するのが「考える」。(大野晋著『日本語練習帳』より)

なんかの出来事があって、こう思った、が感想で、それに対し、どうあったらよかったか、そのために何が今後できるかをあれこれ頭を動かすのが“考える”。

先の運動会の例でいうと、練習中に勝った負けたと一喜一憂するのが“思う”。そこから一步進めて、どうやったら勝てるのか、もっと速くなるのか“考える”。紅白リレーで、長男が「一年生の女子がいつもおそいから」と言っていたので、「じゃあ、走り方教えてあげればいいじゃん」と父。騎馬戦でさっさと帽子を取られた娘。「騎馬の子らと意思疎通ができてなかった。相談の時間を事前に取ればよかった」と。娘の方が少し考えられてますね。まあその後、「先生が相談の時間を取ってくれなかった」とのぼやきが出たのですが、そこは練習後とかに自分らで勝手に相談すればよかったじゃん、と父は思いましたが(笑)。

経験して、思って、その上でどうしようと考えて、場合によってはどうすればできるか、人・物・場所をどう組み合わせれば可能になるか試行錯誤。その時間をどうとってやるかが大事なのかもとも思いました。

そこには、人に想いを伝えたり、相手の考えを聞いたり、そしてすり合わせて、どうするか、いろんな思考と行動が入り混じりますね。

“思う”はスタートで、その上でどう“考える”のか。いろんな喜怒哀楽をパワーにして、いっぱい葛藤してくれたらうれしいなど子どもらを見つつ思う父なのでした。

すず辰マガジンがウェブで読めるようになりました↓



《すず辰について》

鈴木辰徳(辰年:43歳。11.9.7歳の3児の父)がH23に開業。「野菜で笑顔を結ぶ」をモットーに、作る人と食べる人の笑顔の架け橋となるべく、素敵な農家さん、野菜果物のおいしさ楽しさをご提案。路面での販売“マルシェすず辰”を経て、H25/3/25念願の店舗オープン！マンガ“八百森のエリー”絶賛応援中！
函館市本通1-24-3(店舗) 店前・店横駐車可。
平日11時半・土曜12時半開店 17時閉店(日祝日休み)
TEL/FAX:0138-76-9865 メール:suzutatsu831@ncv.jp
HP:<http://suzutatsu831.com/>

先週の「子どもの見守り・成長」をテーマにしたやつが一部のお客さんに好評でしたので、調子に乗ってもう2つ。ちょっと対象年齢は上かもです。

◆ちよつとまじめな話：アナと雪の女王を見て◇

(3年前の)お盆休みに、ディズニー映画の「アナと雪の女王」のDVDをやっとこ借りて家族で見ました。上映当初、長女が「怖い!」、と行きたがらなかったのも、話題作の遅ればせながらの観賞となりました。結果、長女「結構面白かった!」との言。2泊3日の貸出期間で10回近い観賞とあいなりました。(改めて今週も「借りたい」と長女。ちょっとアメリカ人のご家族をアテンドする機会もあり、車中で先方の子供たちと英語で観賞しました)で、そんな話題作を見て、感じたことを少々。

この話、とある王国の姉妹の王女の話です。姉のエルサに雪を操る魔法が生まれつき備わっていること、幼い時のある出来事から、妹のアナは姉が魔法を使えることを忘れ、姉のエルサは魔法を隠し通すため城の一室に籠り、国も他の国との交流を控え、ひっそりと時が過ぎていきます。

で、姉エルサが成人してから、魔法のことが国民にばれ一悶着が起き、話が進んでいくのです。幼いころの事件がきっかけに彼女らの両親である国王・女王は、エルサの魔法を「隠し通す・妹から離す」ことを選択します。でも、他の方法を取っていたら、姉妹の人生も違ったものになっていたかもなあ、と思ったのです。

「雪の魔法」という、物語世界でも異質とされる性質を持つ娘を、世界と隔離し、時間とともに制御できることを祈って見守ったのですが、魔法を制御するためには、エルサ自身が「魔法」という自分の特異な性質を肯定し、いろいろと力を試し、小さな失敗を繰り返す、そのものと向き合うことが大事だったのではと思ったり。

親の立場になると、つつい子ども状況を見て、「転ばぬ先の杖」とばかりに「守ってしまう」ことがあります。先のことを考えると、実は少々痛い目を見ても本人が経験、葛藤していくことに意味があったりします。

妹のアナがある程度の分別がつく年になったら(9・10歳?)、改めて魔法のことを伝え、家族および信頼のおける部下たちで見守りながら、「魔法のある生活」を送っていれば、、、。

まあ、それではお話は盛り上がりませんが(笑)。

一生懸命、話題の歌を我流で歌う次男(2)の姿を見つつ、思った父なのでした。

世の物語の大半が、上のように、端からみたら「こうしたら…」ってことがあったりするかもです。ドラえものの映画なんて最たるもの。小学生になった子もらは「あの道具があるじゃん!」って最近では突っ込んで観ています。

ただそこであっさり解決しないからこそ、大冒険が起り、のび太たちは目に見えない大きな何かを得て大団円(だいだんえん)を迎えるわけです。

その点で行くと、我が母は見事に「見守りの人」でした。中学時代なんかもとから、「あのときいろいろあったんでしょ」とさらっと言われたり。母よ強し。

◆ちよつとまじめな話：二人の友の言葉とひげそりと◇

平成29年の10/20、北海道新聞の夕刊の道南情報版「みなみ風」内のリレーコラム「立待岬」に載った文章です。入院中に考えたことをちよつと書いてみました。

実は先月3週間余り入院生活を送っていました(今は営業再開しています)。

術後、身体の痛みと慣れない環境に寝つけず、2日目以降も、小一時間寝てはすぐ起きてしまい、そのまま寝れなかったり。

寝れなかったら治らんやん、と後ろ向きになっていた4日目の朝。ふと別件で友に言われた「願望と行動が一致しない人が多い」という言葉が頭に浮び、「あれ、もしかして今の俺?」、とわが身を振り返り。

別の友人に過去に言われた「あるものに感謝を」との言葉を思い出し、“あるもの”を一つずつ確認。手術は成功、食事がおいしくとれる、愛する家族がいる、左耳は聞こえないけど右耳は聞こえる…すると力が湧き、一歩踏み出す気に。

で、「あー、包帯ぐるぐるでちゃんとそれんしええやー」と思ってたひげを剃ろうと。剃ってスッキリした自分の顔を鏡で見て、頭もスッキリ。人間って単純なもんです。そんな私の顔を見て、主任看護師の方が一言。「調子よさそうですね。もう病棟内、自分で歩いていいですよ」。なにか、いろんなことがいい方向に転がり出した、術後4日目の日曜日でした。

上手い出来ないことが重なると人間立ち止まってしまう(後戻りする)ときもあります。が、あるものに感謝し、思う方向に向かって一歩踏み出すとがらっと風景が変わるなんてことも。それをつくづく感じた経験でした。

(八百屋すず辰店主)

術後3日間は、ささやかな回復(立てた!、トイレに自分で行けた!、リハビリが始まった! などなど)を素直に喜び感謝できたものが、元来寝ないであろうにもならない人間が4日間も徹夜・半徹な日々が続くであろうにも後ろ向きになり。。

でも、これじゃあかん!、とひげをそったら、上記の「病棟内解禁」に始まり、頭をおおっていた包帯(というかコルセット)も外れ頭も軽くなり。

さらに、点滴の取付機具が電動式(コンセントに刺さっているのでもいちいち引き抜かないといかず、かつ重たい)から、ただの鉄の棒になり軽くなり。

そして、昼のリハビリ後、療法士の先生から、「病院全体を自分だけで歩いていいように看護師さんに許可出しておきますね」と完全な自由を得る!、とへこんでたのがウソのように1日で事態が一気に改善。

「ひげそり」というささやかな一歩が大きく効いた一日だったなあとしみじみ思ったそんな日でした。

そうそう、二人の友人にも感謝!(もちろん愛する家族や皆さまも!)

自分で体験感じたことって、腹に落ちますし、その後の人生の支えになるなあ、とつくづく思ったできごとでした。私の場合、キーワードは“ひげそり”です!